

明日香村の「小墾田」と上坂部の「小墾田」の関連

第41話「おはただの 板だの橋のと 絶してをふみなおしても わたる君かな」では、「上坂部小学校のルーツは板田小学にあり、その後小墾田簡易小学校となりました。では、板田と小墾田の名前の由来は…」と名前の由来を解説しました。今回は、明日香村の「小墾田」と上坂部の「小墾田」の関連について、より詳しく述べていきます。

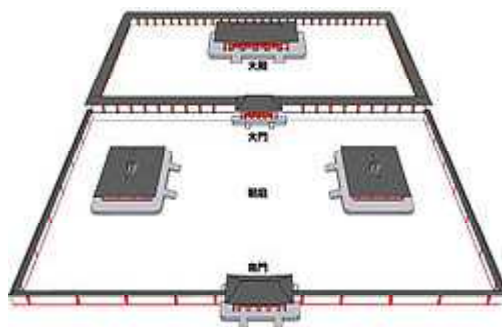
まず、小墾田宮(おはりだのみや)は飛鳥時代の推古朝および奈良時代の淳仁朝・称徳朝の宮殿です。「小治田宮」とも書きます。小墾田宮の所在地については奈良県高市郡明日香村豊浦に「古宮」という小字名があることから、有力地とされていました。近年の発掘調査から、明日香村の雷丘(いかずちのおか)南麓にあった可能性が高くなっています。日本書紀によると603年(推古11年)、豊浦宮(とゆらのみや)で即位した推古女帝は新宮として小墾田宮を造営しここに居を移したと記されています。国家権力の中心として自身の存在示すために、新たに小墾田宮を築造して遷宮したと考えられます。いずれにしろ、両宮とも同じ村内ですから、政治の中心地は明日香にあることに違いはありません。

同音異字の「小治田宮」は、淳仁・称徳朝にあつては、両天皇の行宮として営まれました。推古朝の小墾田宮との関係ははっきりしていませんが、雷丘東南の雷丘東方遺跡3次発掘で「小治田宮」と記す墨書土器破片が多数出土したことから、この付近に「小治田」の地名があり、天平年間末年から平安時代初期ころにかけて、ここに小治田宮があったことが最有力になってきています。小墾田宮は小治田宮と同一か、もしくは隣接にあったと考えます。

次に、上坂部の小墾田(おはただ)は、「大化の改新の時、孝徳天皇が難波宮に遷都した際、上坂部伊佐具神社近くに上陸し、風光明媚な景色を飲んで行在所小墾田宮を営みました。」と摂陽群談7巻に示すところです。行在所(あんざいしょ)とは、天皇が遠出する際の仮の御所です。孝徳天皇は乙巳の変(蘇我馬子・入鹿暗殺)ののち、645年に難波(難波長柄豊崎宮)に遷都し、難波宮 宮殿は652年に完成しました。元号の始まりである大化の改新とよばれる革新政治はこの難波宮でおこなわれました。体制を一新するため、明日香の地を離れ、難波に遷都したのでしょう。この間、孝徳天皇は一時的に滞在した地に、行在所「小墾田宮」を設営したわけです。この「小墾田宮」(おはただのみや)は、明日香の「小墾田宮」(おはりだのみや)の名を模したものと考えます。行在所「小墾田宮」の所在については、上坂部村説の他に、尼崎七松村説、尾張国説がありますが、いずれも伝聞の域を出ません。

学制の発足と小学校設置にあたり、校名に「小墾田」や「板田」を冠したことは、上坂部の人々が地域の歴史文化を大事としていたことがよくわかります。「おはただの 板だの橋のと絶してを ふみなおしても わたる君かな」、この句は伊佐具神社の境内に石碑として刻まれ、よく知られる所です。比して返歌「朽ちぬへき 板田のはしの橋作り 思ふまゝにもわたしつる哉」は殆ど知られぬ句です。

歴史の学習は、背景や係る想いを探ることに意義があります。そして、地域の歴史文化を知ることが、郷土愛に関わります。



参考資料、見取り図 ウィキペディア「小墾田宮」